

幻の街



ソリスト



第一節

彼女の目に映るものは青い空と眩しい太陽、そして果てしない地平線を形作る砂だけだった。少し前まで見えていた石造りの構造物もいつの間にか見えなくなり、自分達の後ろに続いていたはずの足跡も姿を消してしまっている。エルパの西に広がる砂漠、その奥地にあるピラミッドという遺跡を目指して街を出た冒険者の一行は、その砂漠の真ん中で途方に暮れていた。

僅かな希望は小さな泉を見つけた事であり、冒険者達はそこに生えている椰子の木陰でしばしの休憩を取っている。リーダーらしき人物が砂避けのフードを外し、美しい白い髪を風になびかせた。だがその風も、爽やかさとは程遠い砂漠の熱い風である。

振り返るその顔はまだ少女といった面立ちであり、口元に浮かぶのは苦笑であった。

「もうイヤ。こんな暑い中、これ以上わらわは歩かんぞ」

「姫、ですからエルパでお召し物を変えるように言ったではありませんか」

「モフモフを着てるそなたに言われたくない」

むくれ顔の黒髪の少女は、緑茶とようかんを口にしながら文句を言っている。黒髪の少女、アオイチの姫君である黒月姫は、苦笑を浮かべる少女に視線を向けた。

「そもそも、イリスがこんな男の事を信用するのがいけないのよ」

「姫、爪楊枝で人を指してはいけません」

すかさず彼女をたしなめるのは、黒月姫の側近、ジョアン・ファーム。それでも黒月姫は、ようかんに刺していた爪楊枝を一人の青年に向ける。バンダナを頭に巻いた青年は、何も言わずに周囲を見回していた。

バン・ギウというその青年の様子に、白い髪の少女、イリス・イヴィエールは微かな不安を覚える。普段は、お調子者というくらいによくしゃべる青年だからだ。イリスはそっと彼に近づき、少し聞きにくい事を聞くといった感じで口を開いた。

「道に、迷ったんですか？」

「！？ な、訳ないだろ。砂漠は俺の庭だぜ、近道だよ近道」

あっさりとした動揺を示した彼に、イリスはもう一度苦笑を浮かべる。

彼が砂漠に精通している事は間違いがない。この砂漠の盗賊団のリーダーをしていたのだから。そして彼が信頼の置ける人物である事も間違いがない。彼女らの心強い仲間であるカズノ・ナスの友人だからだ。

だからこそ、そのバンが道に迷ったという事実には不安を覚える。泉の周囲は360度が砂の海、目印一つ無い場所は迷宮と変わらない。エルパに戻ろうにも、どの方向から歩いてきたのかさえ分からないのだから。

「ムーウエン！ そなたの髪も暑苦しい、綺麗サツパリ刈ってしまえ！」

「ムーウエンに何するの！！」

「…………少しは涼しくなれましたか、姫」

「うわあああつ！ ジョエ、やりすぎだよお！！」

イリスが振り向くと、モジャモジャ頭のナ・ムーエンが持っていた巻物から飛び出した妖精のジョエが、黒月姫を氷漬けにしたところだった。黒月姫が一行に加わってから、ずっとこんな調子である。

それに、今の黒月姫の機嫌が悪いのには訳がある。彼女が一行に加わったそもそもの理由は、イリス一行の仲間であるレビ・アレンスに一目惚れしたからだ。しかしあいにくと、今のパーティーにレビはいない。アオイチを狙う隼の城の動向を探るために侵入させている影忍者王と連絡を取るため、レビは一旦アオイチへと戻っているのだ。

「イリス、ここはエルパへ戻る事を考えた方がいい。カズノやレビと合流して出直しましょう」

氷から抜け出してガタガタ震える黒月姫に毛布を掛けたジョアンが、イリスに提案した。イリスはそれを聞いていたであろうバンの横顔を見る。エルパへと戻る道くらいは分かっているのだろうか。

「何でカズノまでいないのよ」

「兄貴くらいの男になると、色々と忙しいんだよ！！」

「何が色々よ。どうせ、あのシロとかいう女と冷えたメロンでも食べてんでしょ」

黒月姫との言い争いを始めたバンの姿に、エルパへの道も分からなくなった事を悟る。ジョアンもそれを察したようだ。食べ物はどれくらい持っているかと聞いてきた。

ピラミッドが大きな遺跡だと聞いていた事もあり、一週間分くらいの野宿には耐えられる準備はしてきている。レビも数日で戻ってくる予定であり、カズノも彼女らを追ってピラミッドへと向かう事になっている。遭難したまま救助もされずに餓死という事はないだろうが、何にせよ不安である事には変わりは無かった。

イリスは空を見上げて太陽の高さを確認する。夜の砂漠は一気に冷え込むと聞く。

「少し早いけれど、ここで野宿にしましょう」

当然のごとく文句を言い始めた黒月姫を尻目に、ジョアンは持って来た荷物を開ける。傘のようなものを取り出し、彼女の武器である石弓にセットすると空に打ち上げた。それは空中で広がり、大きなテントとなって地面に降りてくる。黒月姫の居城である黒月城は古代遺跡を改造したものであり、中からはこのような便利な道具も発見されたりするそうだ。

大はしゃぎでテントに入るムーエンとジョエを追いかけて、黒月姫もテントの中に入った。イリスとジョアンがテントに足を向けようとした時、バンが踵を返すのが見えた。

周りの様子を見て来るという彼を、引きとめはしなかった。道に迷った事で一番ショックを受けているのは、他ならぬ彼自身だろう。彼の腕なら、この辺りのモンスターに遅れは取らない。「暗くなる頃に戻ってくる。水浴びその他はそれまでに済ませておいてくれ。覗きとか言われた

くないからな」

ガキに興味はないがと言うバンの後姿に、ジョアンは肩をすくめた。そして姫を呼んできますと言う。イリスも、汗と砂埃で全身が気持ち悪い。泉は小さく浅いが、汗を流すくらいの事はできそうだ。イリスは髪飾りを外した。

膝までくらいの泉に足を踏み入れる。周りはまだ暑いというのに、水は冷たく心地良かった。ひざまずき、泉の水を両手ですくう。そっとその手を掲げると、透明な水が顔を濡らし、首を伝わり、胸元を潤した。二度三度とそれを繰り返す、イリスは水の清らかさをその身に染みこませる。

そして彼女は、仰向けに倒れこむようにして泉に浮かんだ。お尻に触れる泉の底の砂の感触は、サラサラと滑るようだ。小さな雲が太陽を隠し、青空だけが視界を満たす。今は、旅路のどの辺りにいるのだろう。

「な！ 何してるのよ！？」

黒月姫の驚いた声に、イリスは泉に浮かべていた体を起こす。真っ赤な顔の黒月姫は、あわてて視線をそらした。イリスは首をかしげる。

「は、破廉恥・・・って、何でジョアンまで脱ぐの！？」

「脱がねば水は浴びられません。さ、姫。お召し物を」

深窓の令嬢である黒月姫にとって、人前で肌を晒すなど例え同性の前であっても考えられない事なのだ。しかしそんな黒月姫の抵抗をよそに、ジョアンは手際良く彼女の服を脱がしていく。

すっかり裸になった黒月姫をひよいと持ち上げ、ジョアンは彼女を泉へと放り投げた。水飛沫とともに、彼女の体が泉に浸かる。

「乱暴者！ 無礼者！ わらわを誰と心得る！！」

バシャバシャと暴れる黒月姫をあしらうように、ジョアンは彼女の体を絹の手ぬぐいで拭き始めた。黒月姫の扱いには慣れているといった感じの手つきに、イリスは不思議なものを感じた。

黒月姫の側近で護衛を買って出たジョアン・ファームという女性。黒月姫とは小さい頃から一緒に育ったそうだが、ジョアンはずっと大人に見える。スラリと伸びたその肢体は、女性らしさを際立たせながら、柔軟で強靱な力も感じさせる。人と接する時の物腰はスマートで、その声には知的な響きが聞こえる。

しかし、イリスはジョアンの視線に陰を感じるのだ。イリスが暗い視線を感じる時、決まってジョアンがそこにいる。

「何、見てるのよ」

その声に、イリスは我に返った。膝を抱えて丸くなっている黒月姫は、上目遣いにイリスを見ていた。

「外で平然と裸になれるなんて、これだから田舎者は」

「姫、負けているからといって、そういう事を言っはなりません」

「キーっ！！ わらわはまだ成長期！！」

「それにですね、姫。あれば、それなりの苦勞も増えるのですよ。肩が凝ったり」

イリスは胸を手で覆った。

しかし、勝ち負けを論じる事が出来るほど差があるだろうか。少なくともジョアンと比べれば、二人ともどんぐりの背比べでしかない。

第二節

テントの中には煮炊きが可能なスペースもあり、火を焚けば夜の寒さも気にならないくらいになる。いくつかの缶詰を開けて夕食とした後、戻って来たバン・ギウの話聞く。浮かない顔の彼は、明日の朝早くに出発する事だけを告げた。

疲れたのだろう、ムーウェンは既に眠っており、黒月姫も目が閉じかかっている。早く寝て、明日に備える事にした。

「寝ないのですか？」

「見張りだよ」

イリスは泉のほとりに座るバンに、ホットチョコを手渡した。月の出ていない夜は、星々が一層強く輝いて見える。バンはホットチョコのカップに口を付ける振りをして、ボソリとしゃべった。

「迷ったのは、俺のミスじゃねえ・・・」

「私達は、別にバンを責めているわけではないです」

「そういうんじゃ・・・」

言葉を言い終わるより早く、バンは振り向いた。驚いたイリスが視線を向けた先には、ジョアンが立っている。バンは手にしたナイフをしまった。

「足音くらい、立ててもらいたいね」

「ごめんなさい。それより、明日の朝、早くに出ると言ったのはあなたよ」

寒くなってくるわ、そう言ってジョアンは二人に早く寝るよう促した。ゆるゆると立ち上がったバンに手を貸してもらい、イリスも立ち上がる。彼女がテントに足を向けると、今度はムーウェンが出てきた。

「どうした坊主、いっちょまえに眠れないってか？」

「何か、ガタゴト音がする」

寝ぼけ眼のムーウェンはそう言って地面を指差した。バンが這いつくばるような姿勢で地面に耳をつける。砂漠にはベヒーモスのような、地面の中から人を襲うようなモンスターはいなかったはずだ。

口元で指を立てて、バンは慎重に地面から聞こえてくる音を探る。その音はずっと遠くから、規則正しいリズムを刻み続けている。バンは確信を得た顔で立ち上がる。

「列車だ」

エルパ近郊のボンゴレ駅からエリアスに向けて走るボンゴレ列車、その路線が近くを走っているのだろうか。周囲を見てきたはずのバンが、その線路を見落としたりするのだろうか。イリスはその言葉に怪訝な表情を浮かべた。それ以上に気になったのは、ジョアンの表情が一瞬だけ固くなった事だ。

しかし、ボンゴレ駅の近くなれば、エルパにはすぐに戻れるはず。他にめぼしい情報がない以上、音が聞こえた方向に向かって歩くのが最善だ。バンの言葉に、イリスも頷いた。穏やかな表情に戻っているジョアンも、了解したというふうに首を縦に振る。

やがて空が白み始める頃、一行は既に出発の準備を終えていた。

「皆で大あくびなんかして。緊張感が足りないわよ」

愛用の弓を背中に掛けた黒月姫は、一人十分に睡眠を取ったという様子で一行の先頭に立った。とりあえずの方向としてバンが指し示したのは、昨夜の音がした方向だ。ムーウエンは巻物を広げてジョエを呼び出した。フワリと浮かんだ彼女は、そのまま空に上がっていく。

上空でぐるりと周囲を見回したジョエは、何かを見つけたように遠くを指差す。砂丘のてっぺんに上っていた黒月姫も、同じ物を見つけたようだ。

この砂漠に点在する石造りの構造物、その陰に寄り添うように木造の建物が見えた。その前後で鈍く輝いているのはレールであろう。昨夜聞こえた音は、列車の音で間違いなかった。

どちらが先に見つけたと言い争っていたジョエと黒月姫は、そのままの勢いで砂丘を駆け下っていった。今度はどちらが先に到着するかの競争だろう。

「キーっ！ 飛ぶなんて卑怯よ！！」

「負け惜しみ、負け惜しみい」

ようやく二人に追いついたイリス達は、息を整えながら建物を見上げる。遠目で見ると立派な建物だ。向こう側に見える列車も、ピカピカに輝いて見える。イリスは建物に掛かっている看板の文字を読んだ。

「ペスカトーレ駅……ボンゴレ駅じゃないみたい」

バンもジョアンも難しい顔をして駅を見つめていた。助かったという気持ちより、こつ然と現れたようなこの建物を不安に思っているのだ。

しかし、黒月姫とムーウエンは列車に乗る気マンマンである。ムーウエンは駅員に、妖精の乗車券があるかどうかを尋ねていた。

「どちらまでお求めですか？」

「エルパまで」

「するとボンゴレ駅ですね。当駅発の列車はございませんので、停車中の列車に乗っていただき、パスタランドでボンゴレ駅行きに乗り換えて下さい」

にこやかな駅員の顔に警戒心を解かれる気分になる。砂漠をさ迷い歩くより悪い結果になる事もあるまい。一行は乗車券を買い求め、改札口をくぐった。

駅のホームにたたずむのは三階建ての巨大な客車である。窓から見える車内には、たくさんの

乗客の姿が見えた。乗車券の番号を探しながら列車に乗り込む。イリス達の買った乗車券は一番高いもので、宿屋のように個室が設けられている客車だった。席に落ち着くと、すかさずウェイターが飲み物の注文を取りに来た。車窓の景色がゆっくり動き出す。

涼しい風の吹き出す機械が設置されているため、窓の外の強い日差しも気にならない。砂漠の風が砂で美しい模様を描き出している事など、歩いていれば決して気付かなかっただろう。

ムーウエンは機関車を見てくると席を立ち、黒月姫はウェイターに何やら食べ物を注文していた。石弓の整備を始めるジョアンから視線を外し、イリスは窓の外に目を向けた。マンゴーラッシーの爽やかな甘さが喉を潤していく。ガタンゴトンという規則正しいリズムに身を委ね、彼女の意識は遠い景色に向かっていった。

だから、立ち上がったバンのつぶやきには気付かない。

「毒を食らわば・・・ってやつだ」

トイレの場所を探す振りをしながら、バンは列車の中を歩き回る。乗客は自分達のような冒険者風か、そうでなければエルパとエリアスを行き来する商人の様な身なりのものばかりだった。

ウェイターやウェイトレスにも怪しいところはなく、列車そのものの雰囲気にも違和感を覚えるところは無かった。それでも、バンは列車中に目を光らせる。

彼の知っているボンゴレ列車は、現在モンスターに乗っ取られており、彼が率いていた盗賊団でもめったに手を出さない存在だった。パスタランドという名の街も、実際に存在するのかどうか定かではない。

「迷わされた砂漠でこの列車だ・・・にしても、何だよこののん気さは」

ウェイトレスに勧められたレモネードを口にしながら、バンはそっとため息をついた。

第三節

車窓の外が暗くなり、窓に自分の顔が映りこむようになった頃、列車が減速を始めた。ムーウェンに連れられたイリスが客車の展望スペースに行くと、砂漠の真ん中から煌びやかな光が溢れているのが見えた。列車は、その光の中心部へと吸い込まれていく。

「ア、アオイチだって、お祭の夜はこれくらいよ」

そう言いながら黒月姫は目を見張っていた。魔法の灯りをふんだんに用いたその街は、夜だというのが分からないくらいに明るく、星空を圧倒するくらい色とりどりに輝いている。

列車から降りる人波に押されるように街に出たイリス達は、初めて見る街の様子に圧倒された。パスタランドの夜は、昼間のエリアスのように賑やかで活気に溢れているのだ。広場のようなところで一息つくと、とりあえず今晚の宿を探す事にする。ボンゴレ駅行きの列車は明日の夕方に発車するそうだ。

食堂や酒場が軒を連ね、賭け事を売りにしている場所もたくさんあった。その多くはきっと、子供の立ち入りが禁止されるような場所だろう。

「お兄さん、遊んでいかない？」

「姉さん姉さん、俺らと付き合ってよ」

「あら、僕。どうしたの？ お姉さんがいい事教えてあげましょうか？」

「お嬢さん、あなたの美しさをこの夜に輝かせましょう」

賑やかさに慣れてくると、声をかけてくる街の人をうっとおしく感じてくる。何より、どの顔も健康的とは言いがたい顔なのだ。いわゆる夜の街というものをよく知らないイリスでも、関わりあいになってはいけない相手だということくらいは分かる。

黒月姫は嫌悪感を露骨に表情に出しており、ムーウェンは少し怯えた様子でイリスの後ろを歩いていた。一方、バンとジョアンはそんな者達を慣れた様子であしらっている。

盛り場ようやくを抜け、静かな通りに出た。

一軒の宿を見つけてドアを開ける。フロントの男性は、表通りの者達とは全く違う丁寧な物腰だった。イリスがカウンターに近づいた時、通りからけたたましい音が聞こえてくる。

「まったく、この街に静かな場所はな・・・っ!？」

バンの言葉は、轟音にかき消された。宿の入り口に車が突っ込んできたのだ。ムーウェンの頭を抱えるようにして床に伏せたイリスの前で、ジョエが氷の壁を作った。

砂埃の向こうには、ドアを突き破ってきた二台の車と、そこから飛び降りる数人の黒服の姿が見える。同時に、耳の奥に響くような激しい破裂音がたて続けに聞こえてきた。壁や柱が削れる音、ガラス窓やシャンデリアが割れる音、そして花火のような臭いが辺りにたちこめる。

しかしそんな中で、一人声を張り上げる者がいた。

「わらわをアオイチの黒月姫と知っての狼藉か!! アイシクルレインっ!!」

天井近くまで舞い上がった黒月姫は、弓を引き絞る。彼女の持つ黒月のアルジュナが白く輝き、生み出された無数の氷柱が一気に放たれる。

氷が床に突き刺さり砕け散る音は、襲撃者の出していた音をはるかに凌ぎ、黒服達は文字通り尻尾を巻いて逃げ出した。宙返りをきめてフワリと床に降り立った黒月姫は、腕を組んで胸を張る。

「身の程を知るがいいわ、愚か者どもが！！」

フロントのカウンターから顔を出した宿の男性が、床に伏せているイリスを助け起こし、黒月姫の礼を言った。

「いえ、お礼を言われるような事は……………」

メチャクチャになった宿のフロントを見て、イリスは流石に口籠る。襲撃してきた者による破壊より、黒月姫の攻撃の方が被害が大きい。当の黒月姫は、こちらを見ようとしなかった。

「先ほどのスキル、さぞや名のある冒険者様なのでしょう。今晚の宿は別の場所をご紹介します。その代わりと言ってはなんですが、会って頂きたい人がいるのです」

この惨状を不問にしてくれるというのだ、申し出を受けないわけには行かなかった。代わりに紹介された宿に現れたのは、銀色の星型バッジを胸につけた青年だった。彼はイリス達全員と握手を交わし、自己紹介をする。

「私はこのパスタランドの保安官、カルボナーラ。このような事件に遭遇され、さぞ驚かれた事でしょう」

「まったくその通りね。街の安全はどうなっているのかしら」

「お恥ずかしい限りです、プリンセス。実は現在、この街は大変な危機に晒されているのです」

カルボナーラはそう言って、窓の外を指差した。宿のロビーから見えるのは、夜の街にそびえる摩天楼の威容であった。

「あのスパゲッティビルを根城に、ペペロンチーノ・ファミリーがこのパスタランドを乗っ取るようとしているのです」

アーリオ・オーリオ・ペペロンチーノをボスとするペペロンチーノ・ファミリーは、モンスターを手下として、パスタランドの支配を企んでいるのだ。宿や商店は次々とファミリーに買収され、それに応じない店があるとあのように手下を襲撃させる。昔から住んでいた人達は街を追い出され、代わりに無法者やはぐれ者が街に住み着くようになった。もはやカルボナーラ保安官一人では、どうする事もできない状態となっている。

街の状況を説明した彼は、大きく息をついた。そして身を乗り出してこう切り出す。ペペロンチーノの逮捕に協力して欲しいと。

第四節

紹介された宿が建つ区域は、まだペペロンチーノ・ファミリーの手が伸びていない区域で、あのような襲撃もないとの事だった。ベッドからずり落ちそうな毛布を黒月姫に掛け直すと、ジョアンはそっと窓辺に寄った。

カーテンの隙間から外を見ると、街が煌々と光を放っているのが見える。その中心にそびえるスパゲッティビルは、派手なライトアップまでされていた。

「計画の範囲外ね……」

ジョアンは舌打ちと共につぶやいた。パスタランドの事も、ペペロンチーノ・ファミリーの事も、彼女の把握していない事だった。この世界に、自分が把握できていない事が存在する。それが彼女を苛つかせる。

カルボナーラ保安官の申し出を受ける事に反対しなかったのは、そんな苛立たしき故である。それに、この奇妙な街を列車を乗り換えるだけで出られるとも思わなかった。ペペロンチーノというのが何者かは分からないが、モンスターを手下にするというのである、ただの人間とも思われぬ。

直接会って、その正体を確かめる価値はあるはずだ。ジョアンはカーテンを閉めなおし、ベッドへと向かった。黒月姫の寝顔が目に入る。寝言で彼女の名前を呼んでいた。

「いい気なものだわ」

それ以上の事を考える事はせず、ジョアンはベッドに入る。体力をきちんと回復させておかななくてはならない。今日の襲撃者の武装を考えれば、楽な戦いになるとは考えられなかった。

リリパットと呼ばれる小人の世界で発達した火薬の技術は、ジエンディアに新しい武器をもたらした。『銃』と呼ばれるその武器は、従来の武器を大きく上回る連射性能と射程距離を有している。襲撃者が持っていた武器は、その銃であった。

おそらくペペロンチーノ・ファミリーは、全員が銃を扱う職業であるガンスリンガーによって構成されているのだろう。厳しい戦いを強いられるはずだ。

「わらわが飛び出す！ ジョアンは援護を！」

アイシクルレインで迫ってくる敵を足止めし、着地と同時に次のスキルを撃つ黒月姫。彼女の間隙をうかがう敵を、ジョアンの石弓が大きく吹き飛ばす。

さらに攻撃を続けようとする黒月姫の腰を抱いて、ジョアンは柱の陰に飛び込んだ。ほとんど同時に、猛烈な弾幕が大理石の柱を削る音が聞こえる。なおも飛び出そうとする黒月姫を制し、ダークスピアーズを牽制に打ち込む。敵が怯んだ一瞬をついて、イリス達が隠れている壁へと転がり込む。

盾を手にしたバンは肩で息をしており、イリスも服のあちこちに弾丸のかすめた跡を作っている。

銃を乱射しながら二本足で突進してくるガンナーウォーカー。四挺の銃を操るプシュケガンマン。袖口に巨大な銃口を隠し持つ銃九尾。そして全身に銃を装備した機械仕掛けの人形、ガンドール。

それほど広くないビルの廊下で、これらのモンスターがひっきりなしに弾をばら撒くので、前に進むのも一苦勞なのだ。ラベンダー瓶の栓を開けながら、イリスはここが何階くらいかを聞く。

「途中で数える止めちまった……あれがゴールだと思いたいね」

バンの投げつけたナイフが、モンスターの銃を破壊する。敵の数が多くなっているという事は、それだけボスの近くに来ているという事なのだろう。廊下の奥に立派な扉が見える。扉を死守せんと居並ぶモンスターの数を数えると、ジョアンは大きく息を吸った。

「姫、イリス、私が隙を作ります。タイミングを逃さずにありったけのスキルを叩き込んで下さい。バンは三秒だけ私の盾に」

はっきりとした口調には有無を言わせない力強さがあつた。ジョエのヘイルストーンが敵の視界を一瞬奪い、バンとジョアンは壁を飛び出した。

激しい銃撃を盾で受け止めるバンの背後で、ジョアンは石弓を構える。たった一挺の石弓で何ができるのか。イリスは叫び出したい衝動を堪えて、自らの弓を握り締める。ジョアンの口元がほんの少し緩んだ。

次の瞬間、敵の集団のただ中に複数の黒い球体が発生する。黒い球体に触れた敵は、電撃に触れたようになり、密集して銃撃を行っていた敵に混乱が生まれた。イリスと黒月姫が弾かれるように廊下へと飛び出す。

「ゴッドバードフィニッシュ！！」

「サンダーグリフィン！！」

敵の隊列の一角がごっそりと削り取られ、奥の扉までの道が見えた。盾を構えたバンが突進する。そのまま一気に敵の中に飛び込むが、集団の中では敵が容易に反撃出来ない事を見越していた。同士討ちにならないよう銃を捨てて素手で襲い掛かってくる敵を、バンは十分に引き付ける。

「マスカレード！！」

短剣が閃き、複数のモンスターが同時に吹き飛ばされていく。そうして隊列を維持できなくなった敵を、各個に撃破していった。散り散りになって逃げていくモンスターを追う事無く、彼らは奥の扉の前に立つ。

第五節

イリスが重そうな扉に手をかけると、それは音も無く開いた。

広く天井の高い部屋には、重厚な机と応接セットが並び、一面がガラス張りになった壁からはパスタランドが一望できるようになっている。その街並みを眺めていた男が悠然と振り向く。

白いスーツに葉巻の似合うナイスミドル。ペペロンチーノ・ファミリーのボス、アーリオ・オーリオ・ペペロンチーノだ。アーリオは葉巻を消すとゆったりとした口調で話し出した。

「乗客の予定はないはずだったが？」

「保安官の依頼で来ました。あなたには逮捕状が出ています」

「ハハハ、この私を捕まえる法があるとでも？ この街の法は……私だ」

アーリオが銃を抜くのと銃声は同時。しかし、イリスはそれより早く動いている。全弾発射の的人形は先に撃ち抜かれたが、敵の早撃ちを回避する事は出来た。パーティーメンバーが一斉に散る。

重い音とともに撃ち出された石弓の弾に、アーリオは銃を連続して命中させてその軌道を逸らせた。背後に回りこんだバンを振り返る事もせず、ただ腕だけを後ろに向けて正確に彼を狙い撃つと、飛び上がった黒月姫には銃弾の雨を降らせる。ウィンドカッターの突風をもろともせず、アーリオの攻撃は正確を極めた。

その場から動く事無く、ただ体を回転させ両手を自在に動かす事で、全ての方向への攻撃と防御を行うのだ。イリスの放つ攻撃もことごとく銃弾で相殺され、レイン系の攻撃は発動前に潰される。

ムーウェンを狙った攻撃に身を挺したジョエが、銃弾を浴びて巻物の中に消えた。パーティーに走った動揺を見逃す事無く、アーリオは畳み掛けるように銃を乱射する。黒月姫の隠れたテーブルが無数の銃弾によって爆発するように弾け飛び、その破片を浴びた彼女の悲鳴が響く。

「この街は我らの終の棲家となる！ 人としてもモンスターとしても生きられぬ者達のな！」

黒月姫の口にチェリーキャンデーをくわえさせ、イリスは囷になるように大きく動いた。アーリオの言葉に傾けるべき事がある事を感じながら、彼の攻撃が足を止める事を許さない。アーリオの腕の動きを見極めてバックダッシュし、着地と同時に攻撃を放つ。わざと足元に当てた攻撃は、アーリオの姿勢をほんの少しだけ崩した。

だが、そこを狙ったバンの短剣は撃ち落され、ジョアンのインフェルノも決定打とならなかった。イリスはくつと唇を噛む。

傲然とした表情のアーリオは、一人一人潰していこうとでもいうように、ぐるりと周囲を見回した。彼の視線がジョアンに向く。アーリオがその足を踏み出そうとした時、その背後から声が

聞こえた。

「無礼な……まずわらわを狙うべきであろう！！」

その声に振り返ったアーリオの顔面を、黒月姫のキックが捉える。

「幸運の一撃！？ ふざけた真似を！！」

アーリオは激昂し、アイシクルレインのモーションに入った黒月姫に両手の銃を向けた。だが、彼女の口元は笑っている。

「ムーウエン！ 今よ！！」

巻物を手にしたムーウエンはそれを思い切り床に転がした。アーリオの足元に広がった巻物から、ジョエが姿を現した。

「馬鹿な！？」

「この距離なら……黄龍牙！！」

ほぼゼロ距離で放たれた魔法は、アーリオの全身に炸裂する。大きく仰け反ったアーリオの懐にバンが滑り込み、短剣と蹴撃の四連撃、ダークプレニックがアーリオを壁まで吹っ飛ばす。

ガラスの碎ける派手な音。床に膝を付いたアーリオの姿に、イリスは構えていた弓を下ろした。ジョアンと黒月姫がまだ武器を構えていることを確認した上で、彼女はアーリオに近づく。先ほどの言葉の意味を聞いたかった。彼の悪事には、彼なりの理由があると感じのだ。イリスも膝を付き、彼に声を掛けようとする。

しかし、先に口を開いたのはアーリオであった。

「忌むべき姿を見せねばならんとはな！！」

アーリオは大きく腕を振るい、イリスを弾き飛ばす。床に倒れた彼女の目の前で、アーリオはその姿を変える。体の大きさは倍ほどになり、着ていた白いスーツは破れ落ちた。代わりに現れるのは黄色と黒の縞模様の体毛。

割けた口からは牙が覗き、太い腕の先には鋭い爪が鈍い光を見せている。巨大な虎のモンスター、それがアーリオの正体だった。アーリオの爪が、床をざっくりと削った。イリスを抱えて飛び下がったバンが吐き捨てるように言う。

「人に化けてやがったか！」

「化けて？ ……違う！ 私は人間だ！！」

黒月姫の放った矢を握り止めると、その口をあけて激しく咆哮した。凄まじい空気の揺れに、ムーウエンが吹き飛ばされる。ジョエとともに床に転がったムーウエンへと駆け寄るイリスに、アーリオは猛然と突進する。黒月姫のジェノサイドレインをもろともせず、アーリオは両腕を振り上げた。

思わず目をつぶったイリスは、まぶたの向こうに激しい光を見る。彼女は、自分の身がまだ引

き裂かれていない事を確認するように、そっと目を開けた。目の前には、立ったまま全身を黒く焼け焦げさせたアーリオの姿があった。構えていた石弓を下ろすジョアンが、何かをつぶやくの見える。

アーリオが床に崩れ落ちる音で聞き取れなかったそのつぶやきは、こんな事を言っていた。
「キメラが……」

スフィアレインまで使ってしまった自分への苛立ちを隠し、ジョアンはカルボナーラに頼まれていた合図の花火を打ち上げた。後は保安官が何とかするだろう。このボスさえいなくなれば、手下のモンスターも統制を失って散っていくはずだ。

しきりに先ほどのスキルの事を聞いてくる黒月姫をあしらいながら、パーティーメンバーに声を掛けていく。無傷とは行かないが、死ぬような傷までは負わずに済んだようだ。

だが、アーリオの言葉を気にしている様子 of イリスに、ジョアンは内心で舌打ちをした。真相を知る事はないだろうが、イリスのそのような態度がジョアンを苛立たせるのだ。しかし彼女はそれを表には出さない。道具袋からラベンダークッキーを取り出し、皆に配っていく。

「慌てて食べるから喉に詰まらせるのよ」

目を白黒させているムーウェンに、黒月姫が呆れた声を出す。だが彼が指差す方向を見て、黒月姫もクッキーを喉に詰ませた。

倒れていたアーリオがユラユラと立ち上がったのだ。慌てて武器を構えるパーティーの前で、アーリオは足をもつれさせながら窓辺へと足を進める。割れて穴が開いたガラス窓の前で、アーリオはイリス達の方に向き直る。

「我が身を捧げ……この街を閉ざす！ 誰にも冒されぬ我らが街とするために！！」

イリスが駆け寄るより早く、アーリオはその身を窓の外に投じていた。割れたガラスの破片のきらめきとともに、その巨体はあっという間に小さくなっていく。

思わぬ事態に一行が口を閉ざした時、眩しい光がビルの下から湧き上がってきた。目をくらませるその光はイリス達の視界を奪い、そのまま意識まで遠のかせていった。

第六節

「信じないってわけじゃないわよ」

そう言って肩をすくめるのはカラミティ・ジェーン。ボンゴレ列車に乗っていた女冒険者だ。彼女も冒険者として、様々な話を聞いてきた。だからそれがどれほど荒唐無稽であっても、全く信じないという事はしない。嘘は真実からしか生まれず、僅かな真実さえ見えれば、それが冒険の指針となるからだ。

だから今、目の前にいるパーティーが語った話も、否定はしない。リーダーの少女は、誠実な瞳をしているのだ。

それでも簡単に食いつける話ではないため、ジェーンは会話の間をつなぐようにギターを爪弾いた。背後の気配に振り向くと、サボテンのモンスターがすごすごと逃げていく。

「本当に、パスタランドには止まらないの？」

パーティーにいたもう一人の少女、黒月姫が睨むような視線で尋ねる。ジェーンはギターを弾いたまま頷いた。このボンゴレ列車は、ほとんど暴走機関車だ。

モンスターが出没するようになって以来、ボンゴレ駅とエリアスの間をひたすら行き来するだけの列車だった。しかもエリアス側の駅では停まらないため、ボンゴレ駅からしか乗ることが出来ない。この列車でパスタランドに行けたという話は知っているが、列車が停まらなくなって以来、その街は名前も聞かなくなってしまった。砂漠の真ん中の街なので、おおかた寂れて人がいなくなったのだろう。

だから、豪華な客車を引いたボンゴレ列車に乗ってパスタランドに行き、そこでモンスターのギャング団と戦ってきたというパーティーの話を、全て信じる事はしないのだ。もし彼女らの話が本当であれば、こんな風に考えるしかない。

「砂漠で、場所だけじゃなくて時間にも迷ったんじゃない？」

夢や幻の話でないのなら、彼女らはボンゴレ列車の開業当時に迷い込んだ事になる。再びこの時代に戻ってきた彼女らは、ボンゴレ列車の沿線で気を失って倒れていたところを、ジェーン助けられたというわけだ。

根拠も何もなく、ジェーンは思いつきで話した事だけだった。だが、白い髪をショートカットにした美人だけが、納得したような顔をしている事が気になった。警笛が鳴り、駅が近い事を報せる。列車のブレーキが利き始めた。

「シロによろしく言っというて」

そう言って再び列車に乗り込むジェーンに、イリスは礼を言った。しばらくすると銃声が聞こえ、ネズミのモンスターが散り散りになっていくのが見える。出発した列車を見送ると、一行は駅員もいない駅舎を出る。ボンゴレ駅からエルパへは僅かな距離であり、バンも自信を持った足取りでパーティーの先頭に立っていた。

イリスは立ち止まり駅の方を振り返る。

昨夜、自分達がいた街は幻などではなかった。そこにいたモンスターの言葉には、激しい憤りと深い悲しみが聞こえた。失われた街で何が起こったのか、自分達が垣間見たものは何だったのか。

その答えは、この旅の向こうで見つかるのだろうか。

「今度はあなた一人で迷子になるわよ！」

その声に、イリスは前を向き直る。彼女は思い切り微笑むと、腕組みをしたまま自分を待っている黒月姫に向かって、一気に駆け出した。

幻の街

<http://p.booklog.jp/book/26863>

著者：ソリスト

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/1qazxsw226/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/26863>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/26863>